

主題	ひもときシートを取り入れた認知症ご利用者の BPSD（行動・心理症状）の緩和に向けた取り組み
副題	認知症の人の思いや願いをひもとく

ひもときシート	認知症ケア	研究期間	12ヶ月
---------	-------	------	------

事業所	社会福祉法人 浴風会 南陽園		
発表者	合谷 孝文（ごうや たかふみ）	アドバイザー	涌井 雅也（わくい まさや）
共同研究者：5階ケアスタッフ			

電話	03-3334-2159	E-mail	nanyo@yokufuukai.or.jp
FAX	03-3334-1745	URL	http://www.yokufuukai.or.jp/

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	浴風会は、大正14年に関東大震災の被災高齢者の援護を目的に設立された高齢者保健・医療・福祉の総合施設です。特別養護老人ホーム南陽園は昭和46年に定員100名で開設され、平成3年改築後は定員254名（内ショートステイ12名）の5階建て施設となりました。従来型施設で、5階がご利用者38名（内ショートステイ3名）の認知症高齢者の専門フロアとなっています。
------------------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

当園5階では、「PEAP（認知症高齢者への環境支援のための指針）」に基づく環境づくりに継続して取り組んでおり、緩和ケアとしてのタクトータルケアも取り入れてきた。

しかし、日常のケア場面では、大声を上げる、ケアスタッフを呼び続けるなど、認知症によるBPSDが強いご利用者に対してスタッフが対応しきれず、言葉による抑制が増えてしまいがちであった。

対処ケアに終始していてもご利用者の状態は変わらず、他のご利用者への影響も考慮し、スタッフ間でケアのあり方を検討するなかで、ケアリーダーから「ひもときシート」の導入が提案され、フロア全体で取り組むことを決定した。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

5階では、センター方式を一部取り入れたアセスメントツールを使用している。

「ひもときシート」は、根拠のない対応をやりくもに繰り返す状況から、事実と根拠に基づいた適切なケアに繋げるための「思考整理」のためのツールである。

本研究では「ひもときシート」をアセスメントの前段階で使用し、ご利用者の気持ちに添った根拠のある対応を取り入れた施設サービス計画に基づいてケアを提供することで、ご利用者のBPSDが緩和されることを期待した。

また、「ひもときシート」の学習会開催や、記入・確認・共有のためのグループミーティングにより、職員が同じ思考に立つ体制づくりに取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

ケアリーダーを講師とした学習会で、全スタッフがひもときシートの構造や要素、記入の仕方を学んだ後、ご利用者の中から4名を対象を選び、取り組みを開始した。

感じている課題を支援者の視点で評価する「評価的理解」、課題解決に向けて事実の確認や情報を8つの要素から整理する「分析的理解」、ご利用者の視点から課題解決を考えらえるように支援者の思考を展開する「共感的理解」を、各スタッフが記入後ミーティングを行い、考えを共有して解決策を整理していった。

《4. 取り組みの結果と考察》

A様は、入所時は気さくで、温和な性格であった。認知症の進行や既往症の躁うつ病により感情の起伏が激しくなり、突然大声をあげる、テーブルを叩くなどの行動が見られるようになり、手指の骨折にまで至った。

「評価的理解」では、介護を嫌がられるため、スタッフの精神的負担が大きいなど介護者視点から、「分析的理解」では、ご家族以外にも知人や友人の面会も多いことから交友関係が広がったことが伺え、他者との関わりを望まれているのではないかなどご利用者中心の視点から意見が上がり、それらを共有した後の「共感的理解」では、多くの意見が上がり実行に移していった。

スタッフが苗字で声掛けを行うと、強い口調で「私は〇〇です」と旧姓を口にされることから、下の名前と呼ぶとご機嫌よく応えられた。

散歩時に幼児に出会うと、普段見られないような笑顔が見られることから、保育園訪問には必ず参加していただくことにした。

写真を撮られることがお好きで、ご機嫌が悪い時も撮影の声掛けをすると、「私きれいかしら」とご機嫌が良くなるのが分かり、散歩時など撮影の機会を増やした。

それらを施設サービス計画に追加してサービスを提供していくなかで、介護を嫌がられることが殆どなくなり、大声を出すなどのBPSDも緩和されていった。

《5. まとめ、結論》

ご利用者のBPSDが強く、スタッフが対応困難に陥ってしまうと、スタッフに苦手意識が生まれ、声掛けなどの関わりが減っていくことが多い。

しかし、「ひもときシート」を通して、スタッフとの関わりの中でご利用者が発した言葉が、解決の糸口に繋がっていくことが理解できた。そして、その糸口から枝葉のように分かれた多くの可能性や、有する能力に気付くようになっていった。

介護ストレスを感じているスタッフが、ご利用者の思いに立ち返られることが何より大きいといえる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表に当たり、研究の目的・方法をご本人及びご家族に口頭で説明し、同意を得た。不同意による不利益がないこと、発表に際しては写真を使用すること、知り得た情報は本研究以外に使用しないことなどの説明を行った。

《7. 参考文献》

「ひもときテキスト」

発行：認知症介護研究・研修東京センター
「認知症ケアの視点が変わる

[ひもときシート]活用ガイドブック」

発行：中央法規 2013年

監修：認知症介護研究・研修東京センター

編集代表：大久保幸積・宮島 渡

《8. 提案と発信》

現在でも5階では、BPSDが強く、対応が難しいご利用者に「ひもときシート」を活用している。

まだまだ認知症高齢者は目に見えづらく、理解されにくいところはある一方、認知症の方を地域で支える体制づくりが進んでいる。

地域の方との交流の機会に、「ひもときシートの」を広めていきたい。

【メモ欄】